

太閤さんの城と瓦

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



京都市内出土の金箔瓦

安土桃山時代は、特に文化面で大きな飛躍があった時代である。建築・書画・焼物・茶道などは、この時代の特徴をよく表している。人々の海外進出は、より積極的になり、交易も盛んに行なわれた。豊臣秀吉の朝鮮半島への出兵は、我が国に陶磁器の生産技術をもたららし、安土桃山文化の一角を支えることになった。建築物の屋根を飾る瓦も、この時代、城郭建築の変貌につれ、大きく変化していったのである。

戦国時代を武力によって生き残った諸大名は、居城を各所に築造していった。彼らの城は戦闘中心の山城やまじろから、政治・経済の掌握に有利な平山城ひらやまじろや平城ひらじろへと変化し

ていった。安土城・大坂城・伏見城は、これら近世城郭の出発点といえるものである。

山城は、防御のために山上に築かれ、山の自然地形を巧みに取り入れることによって、できるだけ少ない労働力で築造できるように工夫されていた。これに対して、平城や平山城の形態を採る近世城郭は、防御のために広大な地域を川・堀・家臣の屋敷などで取り囲む必要があった。このために大規模な土木工事を施さねばならず、多くの労働力と資材を必要とした。

また、近世城郭は軍事力を常時権力者の近辺に置くためのものでもあった。それ以前の、いわゆる戦国大名は、農村を基盤とした土

着戦闘集団であったが、近世大名は、兵農分離を強力に押し進め、身分制度を確立させるためにも、農民とは一線を画された武士を城下町に取り込むことが必要とされたのである。

なかでも大坂城は、実に広大な地域を取り込んで、一つの城下町を形成していた。豊臣秀吉が天正11年(1583)に築造を開始した大坂城は、石山本願寺の跡地を中心にして、北に向かって突き出した上町台地うえまちを切断するように堀が何重にも築かれていた。外郭は、北は淀川、南は四天王寺付近まで及んだといわれている。その中には、大名屋敷・職人町・市場・港などがつくられ、近世都市の先駆的な



調査でみつかった伏見城の石垣

ものとなった。

大坂城や伏見城など秀吉が築造した城郭は、秀吉の天下統一のシンボルでもあった。それゆえ、壮大な建築と華麗な装飾によって権力者の存在感を強く印象づけ、無言の威圧を示さなくてはならなかった。天守閣は高くそびえ、周囲の築地塀は金箔瓦によって装飾されていた。そして、建物の内部は、天井・壁・襖・欄間など、様々な部位にいたるまで飾りたてられていたのである。成立期の近世城郭は、政治経済の中核であり、軍事拠点であるばかりでなく、当時の文化・芸術の集大成であったともいえる。

戦国時代の山城建築には使用されていなかった瓦も、大きな建物がたちならぶ近世城郭には当然採用されることになった。近世城郭は、複雑な入母屋構造になっているため、瓦も多種多様に変化していった。薨巴・薨唐草・菊丸・輪

違い・青海波・松皮菱など様々なものがみえ、袖瓦や変化に富んだ鬼瓦が出現する。これらのうち多くのものの瓦当の文様部分には、金箔が施され光り輝いていた。金箔は瓦当面の凸部に貼り付けられており、接着剤として朱漆を用いることが多い。しかし、いかに金が多くあったとはいえ、全面に金箔を施すものはない。

金で飾った最初の城郭は織田信長の安土城であった。この城はかなり斬新であったらしく、後の築城法に与えた影響は大きかった。信長が本能寺の変で倒れなければ、彼の手になる城が次々に築造されていたことであろう。

信長のあとを受けたのが秀吉であった。秀吉は自らの権威を保つため様々な努力を行なった。天皇の権威を利用し、また多くの寺院を保護して寺院勢力を味方に付けた。金箔瓦を使った壮大・華麗な城の建築も、権威を示すためのひ

とつの表現であったのであろう。

大坂城のほかに、指月城が地震で倒壊した後、場所を代えて築かれた伏見城（現在の明治天皇陵北側付近）の跡からも多くの金箔瓦が発掘調査で出土している。

また、城郭のみならず秀吉の手になる様々な諸建築は、ことごとく金箔瓦で飾られていたようである。天正15年（1587）9月に造営された聚楽第の周辺部や、翌年5月に東山に造営された方広寺大仏殿の跡からも多くの金箔瓦が出土している。

秀吉の死後も、金箔瓦は、豊国神社や厳島神社千畳閣など秀吉ゆかりの建物に用いられたりした。しかし、江戸幕府が開かれてから以後は徐々に使われなくなった。安土桃山時代のはじまりとともに生まれ、豊臣秀吉とともに、栄えやがて衰えていった金箔瓦は、太閤秀吉の瓦であるといってもよいであろう。